

明治前半期の朝鮮観

一 侵略と連帯

明治期における日本人の朝鮮観というテーマに関しては、周知のように、自由民権派のアジア認識について古くから貴重な研究の積み重ねがあります。いま、この分野での戦後の研究史にあらわれた特徴をごく大まかに整理すれば、次のようになるでしょう。第一に、戦争への反省から侵略的な思想を厳しく批判的に把えかえずとともに、他方で連帯の思想を発掘し跡付けようとする課題意識が研究の出発点になったこと。第二に、そこでの連帯と侵略との微妙な関係については、主観的な連帯の意図に対し、侵略政策のなかで果たした客観的な役割に注意が喚起されたこと。そして第三には、歴史的推移として連帯論の弱化と侵略論への傾斜がみられ、壬午事変から甲申事変期がその転換点であると捉えられたこと。さらに第四に、こうした変遷が民権論から国権拡張論への転化と相関的に理解されたこと、等々です。

このような研究の枠組に根本的な批判を加えたのが、竹内好の一連の発言、とりわけ一九六三年の「アジア主義の展望」⁽¹⁾でした。そこで竹内は、侵略と連帯の二者択一的な峻別が実際のうえで

吉野 誠

困難なことを指摘するとともに、民権論・国権論の機械的な区別、それとアジア認識との相即的な把握に疑問を提示しました。アジア主義研究の礎石となったこの竹内の提言は、いっぽうで「侵略を憎むあまり、侵略という形を通じてあらわされているアジア連帯感までを否定するのは、湯といっしょに赤ん坊まで流してしまわないかをおそれる」という発言の一面的な拡張を図る傾向をも生みだしましたが、当時のそうした傾向への批判は、大体のところ、主観的な侵略の意図を指摘し客観的にはたした役割を対置するといった次元にとどまったといえるでしょう。こうしたなかで、侵略論も連帯論もともにブルジョアの発展を志向する意識の発現形態にはかならず、初発より両者が混在して表われることを指摘した矢沢康祐⁽²⁾や、そのような近代主義的文明化を至上とする意識が侵略の加害者としての意識を欠落させ、指導者意識と蔑視感をうみだす要因になったことを指摘した山田昭次⁽³⁾らの研究が、今日なお踏まえるべき成果として存在していることを、改めて確認しておかなければならないと思います。

ところで、竹内の問題提起は、戦後の日本人のアジアへの無関心に対して「明治以来つちかかってきたアジアを主体的に考える姿

勢」を取り上げ再検討するなから、日本近代を根底的に批判する論理と、それを超克するための手掛かりをさぐろうとするところに核心があり、その一環としてアジア主義に光をあてたものでした。一九六〇年代をへて七〇年代以降の日本は、近代の完成と⁽⁴⁾いいうる状況が現出し、したがって近代批判の課題がいっそう重要性を帯びるに至りました。また、日本資本主義のアジア進出にもなつて、この時期には侵略と連帯の問題が実践のうえで緊要性を増していくこととなります。その場合、竹内が指摘したように、主観的な意識のレベルでの侵略・連帯の区別は現実において有効性をもちえず、客観的役割論によつては主体的なアジア認識を創り出せないことが切実に感じられるようになったわけです。

だが、同時に、侵略と連帯の区別の明確化を回避したのでは、そもそも実践のための指針構築という課題への接近を放棄したものと⁽⁵⁾いわざるをえません。竹内の主張が問題の提起にとどまていて、この点にかかわります。侵略・連帯の峻別の有効性を疑いながら竹内は、「アジア諸国の連帯（侵略を手段とする）と否とを問わず」指向を内包している「云々」というように、結局のところ「連帯」の語でアジア主義を定義するに終つてしまひました。主観的な連帯の意識で括られるアジア主義に繪して高い評価を与えてしまったのでは、連帯を志向しながら侵略に陥つてしまつたメカニズムの解明というアジア主義研究の核心にせまりえないのではないか。また、アジアへの情動的な共感の底に近代文明批判の契機を抉出しようとする竹内にとつての中心的な課題に

対しても、有効性を發揮できなくなるのではないかと思われれます。アジア主義をいまますこし多面的な角度から腑分けし定義づける作業が、さしあつたつての重要な課題といえるのではないのでしょうか。本稿では、そうした課題を念頭に置きながら、日清戦争以前の時期における福沢諭吉・大阪事件・『大東合邦論』および天祐俠の朝鮮論を検討し、問題点の整理をしてみたいと考えます。この四者は、初期ナショナリズムの混沌としたなからアジア主義が発生してくる基盤となつた一八八〇年代の思想状況として、竹内が先の論文でとりあげ検討を加えているものです。

二 福沢「脱亜論」をめぐる

(1) 朝鮮文明化論

福沢諭吉のアジア論は一八八五年の「脱亜論」を境に、従来のアジア改造論からアジア分割論、すなわち露骨な侵略の主張に転換したといわれます。⁽⁶⁾「支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとつて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に從つて処分すべきのみ」との一節は、確かに列強による分割競争への参入を述べたもので、「隣国の開明を待つて共にアジアを興す」というそれまでの主張を放棄した発言です。しかしながら、「脱亜論」発表後の福沢は、朝鮮に関する発言を減少させたばかりでなく、「脱亜論」で示したような分割論の主張はほとんど行なつていません。一八九〇年代に入ると再び朝鮮問題についての論評が多くなりますが、そこでの主張は「脱亜論」以前とほぼ同様の

朝鮮改造＝文明化論でした。

たとえば、一八九二年の「一大英断を要す」で福沢は、国内対立の解消には対外問題の惹起が最上の策だとして朝鮮への注目を要求しますが、その際に日本がとるべき政策としては、内政・軍備・財政・郵便・電信・鉄道などの面で朝鮮が「文明の風を採用」し、独立の実力が養えるよう助力することが強調されています。九四年の「朝鮮の文明事業を助長せしむ可し」では、「政治の仕組を改良」しさえすれば朝鮮も「国の富実を致して優に東洋の一富国たること決して難きに非ず」とし、日本が朝鮮の文明的改革に力を貸さなければならぬと言います。日清戦争の時期を挟んで、同趣旨の論説が繰り返し発表されました。日清戦争期における福沢の朝鮮論を貫いているのは、「脱亜論」流の分割論ではなく、文明主義的な朝鮮改造論だったと言わねばなりません。

一八八五年の「脱亜論」は、直接には、甲申政変失敗ののち天津条約による清国との妥協体制への移行に符節を合わせ、朝鮮問題からひとまず手をひくことを合理化した撤退宣言ともいえるべきものでした。これに対し、朝鮮への進出・介入が具体的な日程のぼり、実際に着手されつつある時期に唱えられたのは、もっぱら朝鮮文明化論だったことになりました。このことは、分割論という露骨な侵略論よりは文明主義の主張こそが、現実の侵略を正当化する議論としてはるかに有効性をもっていたことを端的にしめすものといえましょう。「軟弱無廉恥の國民を導いて文明流の改革を實行せしめんとするには、気の毒ながら脅迫の筆法に依頼せ

ざるを得ず」、「文明進歩のために其妨害物を排除せんとするに多少の殺風景を演ずるは到底免れざる」云々というように、文明の名において侵略が正当化された訳です。

(2) 脱亜主義

福沢の主張が一貫して朝鮮改造＝文明化論だったとしますと、一八八五年の「脱亜論」は彼自身のアジア論の展開のなかでいかなる位置をしめているのか。そこに、なんらかの意味で画期となる要素はないのでしょうか。

ほぼ同じ内容の改造論でありながら、「脱亜論」以前のいわゆる東洋盟主論が、文明化に先じた日本がアジアの一員として朝鮮・中国の開明化を助け東洋を發展させる義務を負っていると主張するのに対し、日清戦争前後の時期の改造論では、徹底して「世界文明」の立場が言われ「世界共通の文明主義を拡張するの天職」が強調されているところに特徴があります。「世界文明の風潮が人の手を仮りて波動を朝鮮に及ぼしたるものにして、日本人は只これが動機たるに過ぎざるのみ」との言い方は、行きがかり上「日本を師として事を為す可きや、或は更に西洋諸国の中に依頼して謀を為す可きや、時の事情に従ひ彼国人の自由になんして差支ある可らず」という発言すら生むことになりました。「脱亜論」における主張のうち分割論はうけつがれませんでした。「心においてアジア東方の悪友を謝絶」し「其伍を脱して西洋の文明国と進退を共に」しようとする志向性だけは、こののちの福沢にとって一貫した立場になっていったといえることができます。

「脱亜論」以後のこうした傾向を仮に脱亜主義と名づけますと、それ以前の福沢の主張は、西洋対東洋という対抗関係のなかで、あくまでも東洋の一員としての立場から、東洋の興起を追求するといった構えをとっています。これを、脱亜主義に対するアジア主義のもっとも緩い定義として大過ないでしょう。福沢は「脱亜論」を境にして、アジア主義的な傾向をもった主張から脱亜主義に転換したことになります。朝鮮のみならず中国までを組み込んで立論しようとした点に、東洋盟主論が破綻する原因のひとつがあったわけですが、それをあえて包摂しようとしたところにアジア主義としての性格が表われているとみるべきです。福沢が一八八〇年代の前半期にアジア主義的なかたちで朝鮮改造＝侵略を立論しようとしたのは、この時期にアジア主義的な主張をうけいれる空気が強まっていたからにはかなりません。

三 文明主義の朝鮮論

(1) 大阪事件の連帯論

さて、福沢と同じく文明主義を標榜しながら、「脱亜論」以後の時期にもなおアジア主義的な連帯論を唱えつつづけていたのが、大井憲太郎をはじめとする大阪事件のメンバーです。「朝鮮が独立すれば朝鮮の幸福は固より日本の為にも至大の幸福」であり、「朝鮮の改革が原由となりて支那に改革の感を与ふることもあるべければ即朝鮮の改革は亜細亜改革の端緒と成るべきもの」だというように、彼らはアジアの興起をうたいました。さらに、自分

たちの目指す自由主義が「我國政治上に行なわれざるのみならず我隣國なる支那朝鮮にも亦行なわれず」、「其人民は専制政治の下に在りて……自主の權なく又参政の權なく恰も人民は政府の爲めに存在するが如き觀を為し」ていると述べる如く、言葉に表われる限りでは、朝鮮や中国と同一の課題を抱えるアジアの一員として日本を位置付けています。アジア主義の傾向を強く帯びた主張といつてよいでしょう。

ところで、大阪事件の構想は、日本人壮士による閔氏要人の暗殺↓独立党政府の樹立↓日清の対立↓愛国心の高揚↓国内民権革命の貫徹といった内容のものでした。日清対立による愛国心高揚という、甲申事変時における民心激昂の再現を期した計画が、たやすく排外的な國權主義に擱られてしまふだろことは想像するに難くありません。それはともかくとして、右のような国内革命構想において連帯論に課せられた課題は、閔氏打倒による朝鮮改革への助力を正当化し、さらに清國との対立惹起を正当化すること、この二点に尽きるわけです。そして、両者を同時に説明するものこそが、文明主義の論理でした。

西洋文明と東洋野蛮、この対立の図式のなかで東洋の文明化をはばんでいるのが清國、文明の途に一歩ふみだしているのが日本であり、朝鮮は両者が相克しているところである。したがって、朝鮮の文明化を妨げている事大党を倒し、うしろだてになっている清國を排除するとともに、清國自体の文明化をも促さねばならないというのが、彼らの掲げた理屈でした。こうした文明主

義的連帯論の極致が、「朝鮮人も亦父母兄弟なり。彼れ日本を助くれば日本人も亦彼を助くるの感想を起すなるべし」という大井の「好意主義」、すなわち善意による連帯を看板にした文明の押し付け、侵略論にはかなりません。大阪事件のメンバーが主張したアジア主義は、文明主義的なアジア主義の典型であったということが出来ます。

(2) 『大東合邦論』および天佑俠

福沢や大井らのアジア主義が西洋文明によるアジアの興隆を唱えたのに対し、これと趣を異にしているようにみえるのが、樽井藤吉『大東合邦論』のアジア主義です。日本と朝鮮の対等合同で西洋列強の侵略を防ぐという樽井の構想を、「空前にして絶後の創見」と評した竹内は、この創見がうみだされたのは樽井に「洋学の素養」がなかったからだとのべ、西洋文明を超えるアジア主義の可能性を示唆しているかのようです。はたして、そこに文明主義を克服しようような要素が見い出せるのでしょうか。

樽井が朝鮮の歴史について語っている部分を見ると、その特徴として停滞的な性格を挙げており、西洋諸国が到達した先進的な段階を目標にして「富強開明」すべきことが説かれています。反面、朝鮮の伝統的なものに対してはまったく否定的な見方が示され、西洋文明の原理たる「競争」に対して強調された東洋の原理「親和」も、もっぱら合邦を可能にする条件として述べられているにすぎません。アジア＝朝鮮の独自性のなかに、西洋文明を超える原理を探ろうという志向は、『大東合邦論』から読み取る

ことはできないと思われます。

いまひとつ樽井が朝鮮史の特色とするのは自主性の欠如、すなわち中国への依存心が主体性を奪い発展を遅らせた原因だということです。実は『大東合邦論』で樽井が強調したかったことはこの一点にあり、日清の対立のなかで朝鮮は日本とこそ結ぶべきだと主張するのです。その根拠とされたのが、文明の立場でした。文明化に先んじた日本と手を握るのが有利であり、清国と結んだのでは「富強開明」はできないというわけです。「今、朝鮮国百事改進の模範は隣国日本に在り。之を日本の万里欧州に学ぶに比せば、勞少なくて利大なり。東亜の氣運、朝鮮を眞護すと謂うもまた可なり」云々。明治維新以後の西洋風開化の肯定のうえに立った文明主義、これによって文明日本の朝鮮侵略を正当化しようというのが樽井の合邦論でした。

最後に、やはり福沢や大井らとは別の潮流に立つとみなされる天佑俠のアジア主義を、メンバーのひとり武田範之を例に検討しておきましょう。天佑俠に関しては、彼らの行動の意図がどこにあったか、東学農民軍の支援にあつたのか、日清戦争の挑発にあつたのかということが問題にされます。しかし、参加メンバーにとって農民軍の支援とはすなわち閔氏政権の打倒を意味し、それはつまるところ親日政権の樹立、清国勢力の排除と同義でした。したがって、日清開戦は願ってもない出来ごとであり、東学支援から行動を出発させた彼らはこそって日本軍の密偵活動に加わっていくこととなります。武田は日本に帰ったあと、「此度の日清

開戦は私共が原動者即ち開戦の導火線」となったもので、「輕拳扇揚シテ身一道ノ火線トナリ以テ必ズ戦端ヲ抽出センコトヲ期」したのだと、自慢げに語っています。農民軍支援と開戦の火付役とは彼にとって一貫した矛盾のないものであり、両者をつなぐ理由づけはここでもまた文明の論理でした。

天佑俠が実際に行なつた活動とは、ただひとつ全州和約後に全蹕準と会つて再蜂起を勧めたことです。その全蹕準が日清開戦のちに反日の旗をかかげて第二次蜂起したことは、彼らにたいへんな衝撃を与えました。武田は、全蹕準を説得するため朝鮮へ派遣してくれと、広島大本營の樺山資紀に二度にわたつて上書し、その際に示すための「全蹕準に与ふる書」を執筆します。そこで武田が強調したことは、もっぱら清國への期待を捨てて日本と結ぶということに尽きます。それによつてこそ、文明開化が進みうるというのです。

樺山への上書で武田は、「明叔（全蹕準）ヲ説キテ之ヲ起伏セシメ、明叔起伏セバ共ニ崔時亨ヲ説キ、……大接主ヲシテ首トシテ文明ヲ唱道セシメ、然ルトキハ頑冥ノ贅疣却テ化シテ文明ノ一新団肉ヲ得ルニ至ラン」との展望を示し、「若シ明叔ヲ得バ、将ニ明叔ヲ扶ケテ東学ヲ革新シ、三南ノ頑民ト俱ニ文明ノ域ニ躋ラント欲スルノミ」と言います。全蹕準に対しては、「今や朝鮮、天地一転して大光明を放つ。何ぞ夫子の英気を續ぎ、天下の民と手に文明開化を新作せずして、徒らに黒山鬼窟の活計を為すや」と書き、また、「鎖港攘夷の論は、我國三十年前に亦この擾あり。

幾多の英雄、空しく相殺死す。爾後はじめて文明の術を策取し、今や暮爾の小嶋は富強にして万国に抗敵す。往夢を顧みて一笑すべし。しかるに当時の英雄、まさに自ら悟らずして痛哭憤惋し、袂を奮いて死せんとするもの、其の数を紀せず。今の状勢は、我三十年前と稍やく相似たり」と述べています。ここには、文明主義の徹底という立場からとはいへ福沢や大井らにみられた現状批判のかけらすらなく、明治維新以後の文明化への全面肯定・賛美の姿勢しか読み取ることができないというべきでしょう。

四 アジア主義の可能性

以上のように、「脱亜論」以後における福沢の主張、すなわち西洋諸国によつてなりたつ国際社会でそれら文明国と同格の一員たるべく行動しようとする志向を脱亜主義と規定し、その対立概念としてのアジア主義を、あくまでもアジアの一員として日本の国際行動を追求していこうとする志向性というように、ひとまず定義してみました。そのうえで簡単な検討ながら確認しうるのは、「脱亜論」以前の福沢や大井ら大阪事件メンバーのアジア主義はもとより、樽井や武田らのそれも、文明主義という点で脱亜主義と共通していることです。

もちろん、西洋文明をモデルにしたアジア改造を公言する福沢や大井が伝統への否定的姿勢をとっているのに対して、樽井や武田らの場合は、日本の伝統的なものの独自性・優秀性を強調します。しかしながら、その独自性や優秀性とは急速な文明開化がで

きた要因として指摘されたものにすぎず、結局のところ文明主義の立場にたった評価という以外にありません。さらにまた、樽井が「国民崇宗家爲皇室、故皇統連續、二千五百余年、即不老不死之天皇統治焉」と述べ、武田が「唯我日本、神代逸矣、自書契可紀二千五百有余載、神孫神子、繼繼承承、有一民窺神器」などというように、天皇支配の永続性を朝鮮や中国とは異質な日本歴史の優れた特質として強調する彼らの主張は、そもそも立論の方向からしてアジア主義とは逆のものだったというべきでしょう。その直接の源流をなす幕末の尊皇攘夷論の場合とおなじように、西洋文明による侵略への怒りに発しながら、日本の独自性をアジアの共通性のなかに探るのではなく、もっぱら東洋＝中国文明との異質性・差違性を追究する方向で組み立てられた議論です。こうした日本主義が、文明主義を批判・克服しえぬばかりでなく、現実の歴史過程において西洋的近代化を推進する機能を果たすものであったことは、あらためて強調するまでもないところです。

このように、「一八八〇年代の思想状況」のなかにみえるアジア主義は、つまるところ文明主義を超える契機を内包しておらず、西洋文明に抗して「アジアの原理」を探ろうという志向を、そこに見出すのはきわめて困難なことといわなければなりません。このの本格的な形成・展開をみせる日本のアジア主義は、この限界性について越えることができず、したがって侵略的な性格を払拭することが不可能だったもののように思われます。とはいえ、アジアへの共感を基礎とした思想的営為のなかに近代文明批判の

可能性をさぐろうとする観点にたてば、限界性の厳しい指摘とともに、それを克服する努力の存在を無視してしまいうわけにもいえないでしょう。朝鮮や中国の側から日本のアジア主義を照射することなどとともに、今後の課題とせざるをえません。

註

- (1) 竹内好編『アジア主義』筑摩書房、一九六三年。
- (2) 矢沢康祐「明治前半期ブルジョア民族主義の二つの発現形態」『歴史学研究』二三八、一九六〇年。
- (3) 山田昭次「立憲改進黨における対アジア意識と資本主義体制の構築」『史苑』二五一一、一九六四年、「自由民権期における興亜論と脱亜論」『朝鮮史研究会論文集』六、一九六九年、「征韓論・自由民権論・文明開化論」『朝鮮史研究会論文集』七、一九七〇年）など。
- (4) 七〇年代以降の日本社会の諸現象を近代の解体・終焉ないし新時代への胎動の開始などとみるよりは、やはり近代のなれのはてとしての腐敗・腐朽現象と考えるべきでしょう。そもそも近代文明のなから新しい高次の文明など生まれてくるものなのか、新たな時代を創出する途を近代文明そのものへ内在することによって探ろうという方法が有効なのかどうか。アジア主義研究の必要性の自覚は、この問題に懐疑するところから始まるもののように思われます。
- (5) 福沢に関しては、拙稿「福沢論吉の朝鮮論」、『朝鮮史研究会論文集』二六、一九八九年）参照。
- (6) 大阪事件に関しては、拙稿「大阪事件における朝鮮」、『東海大学紀要文学部』四八、一九八八年）参照。

(7) 樽井に関しては、拙稿『大東合邦論』の朝鮮観」(『文明研究』四、一九八六年) 参照。

(8) 一八八五年に書かれたという『大東合邦論』の最初の草稿が、この時期に樽井らがすすめていた「金玉均を再起せしめんとする企謀に密接し、その一環としての位置を占めるもの」だったという細野浩二『大東合邦』構想と『併韓』の構図(『史観』一〇七、一八八二年)の推測は、きわめて説得的です。樽井の構想が日朝中三国の合同を主張せず、日朝の合邦を完成させたのちに中国と提携せよと説くのは、決して実現可能で着実なプランを示そうとしたからなのではなく、まさに清国の勢力を排除するところに主要なねらいがあったからに他なりません。

(9) 天佑俠については、姜昌一「天佑俠と『朝鮮問題』」(『史学雑誌』九七—八、一九八八年)が、全貌説明の手がかりを与えてくれます。姜論文によって、「女洋社の壮士集団」とする従来の通説が限界を指摘され、天佑俠はいくつかの潮流からなる「朝鮮浪人」のグループであることが明らかにされました。したがって、個々のメンバーについての綿密な分析が必要になるわけですが、ここではメンバーのひとり武田を例にした若干の検討にとどめざるを得ません。

(10) 吉田松陰の朝鮮観を検討した拙稿「吉田松陰と朝鮮」(『朝鮮学報』一二八、一九八八年) 参照。

(11) ここでいう文明主義の対立概念としてのアジア主義とは、けっして近代文明に別の体系を対置したり、異なるヴィジョンを示したりするものではなく、あくまでも近代批判の手がかりを「アジア」のなかに探っていくとする志向性

とでも規定されるものです。

(12) 同じようなアジア連帯の主張ながら、日本よりはるかに過酷な近代のなかで形成された朝鮮・中国のアジア主義が、より多様な可能性をもったものとして研究の対象にされる必要があるでしょう。なお一言すれば、中国革命と向かいあうことを通じて近代批判の原理を紡ぎ出そうとした竹内の「方法としてのアジア」の主張は、いまや肝心の中国自身の近代主義的変質をまねに色あせてしまったかみえます。しかしながら、侵略への抵抗のなかにこそ近代文明を超える契機ははぐまれるにしても、その抵抗のうちにははじめから近代主義と反近代主義の相克が存在しつづけていたはずで、近代資本主義の世界体制のもとにおいては近代主義の潮流がつねに勝利せざるをえないという当り前の事実を迎合してしまうのではなく、中国革命の過程に内在する近代批判の契機を近代主義との激しい対抗の具体相において抉出することがなにもまして大切な課題であるといえるでしょう。竹内の主張が意義を失なったわけでは、けっしてないと思われまます。